

好きです!



オードリー・ヘプバーン

「永遠の妖精」とうたわれる女優オードリー・ヘプバーン(1929〜93)。ココ・シャネルやジーン・バーキンなど名だたる女性の生き様を紹介してきた山口路子さん(53)は、「失意の時にひかれ、背筋を伸ばしてくれた人」だと言う。

山口さんは10代から映画館に通い、「ローマの休日」などの作品に親しんできた。「でも優等生すぎて、深い興味はわかなかった」という。

32歳で出産。子育てと執筆活動に専念していた40歳の頃、

つらい時も気品 励まされる



「気品のカケラでも身につけたい」とオードリーについての著作を手話で話す山口路子さん＝東京都内

「自分なりに信じていた愛」を失った。書くことや生きる意味も見失っていた時、依頼された次回作のリサーチでオードリーの言葉や歩みをたどった。

9歳の時に両親が離婚。ナチスが侵襲したオランダで戦争を肌で感じながら育った。貧しさの中、生活のために女優に。足を知り、謙虚だった。

「自分自身に対して100パーセント率直になって、欠点から目をそらさずに正面から向かい合い、欠点以外のものに磨きをかけるのです」

2度の結婚。授かった2人の子ども。「最大の願望は、いわゆる『キャリアウーマン』にならずにキャリアを築く」と一時は引退もして家庭を優先した。

だがいずれも離婚に終わった。山口さんは「同じように葛藤を抱えていた。でも、つらい時も気品を手放さなかった魅力的な人」と感じた。

オードリーは58歳で本格的にユニセフの仕事と出会う。記者から「自分の時間を犠牲にしているのでは」と質問されこう答えた。「犠牲なんかではありません。授かった贈り物です」

63歳で亡くなるまで、親善大使として、ポロシャツとジーンズで内戦や飢餓に苦しむ子どもたちを慰問。世界に支援と平和の必要性を発信し続けた。どこに行くのも51歳で出会ったパートナーと一緒にだった。

山口さんは「求め続ければ晩年にだって人生の使命は見つかる」と励まされた。再び書き始め、オードリーについて2冊の本も出版した。「かわいさだけではない気品。そしてまっすぐな志が、時代を超えて愛される理由だと思えます」(山内深紗子)